

静岡相撲部OBちから会
昭和30年ちから会創立
昭和39年 11月 初刊
会 長 細倉涼太

☆キャプテンの品格 吉永俊彦さんを偲んで

岩崎安次

昭和三十一年私が静岡相撲部に入部した時は、三年生五人、二年生五人の先輩が居た。その時のキャプテンが吉永さんである。当初は校内（現在の道場の前）の屋根なし土俵での稽古、五半月過ぎからは常盤公園での夜の稽古である。一旦家に帰り夕方また出かけてくるといった具合で、列車時刻に合わせてのことで苦痛であった。この年の九月常盤公園で東海総体が行われた。年によって条件枠がちがったり、個人戦はオープン競技で行われたり、行われなかったりであったが、この年は各県二校、予選A Bブロックリーグ、上位四校での決勝リーグであった。前年静岡は先鋒石川嘉夫・次鋒渡辺実・中堅吉永輝夫・副将小林伸治・大将長島佐治郎のメンバーで優勝しているので県外勢のマークがきびしかった。県外は静岡・清商と中京商・東海高の愛知勢の戦いとなった。先鋒吉永俊彦・次鋒岩崎安次・中堅杉山秀男・副将伏見博行・大将桜井光交代新井正司の布陣で静岡は東海に5対0・清商に4対1、中京商が清商に5対0・東海に0対5で決勝は静岡対中京商となる。点差勝負で先鋒吉永さんが相手先鋒を上手投で降し、次鋒として次に上がる私に「優勝決まったから気負わずにやれ」と耳打ちしてくれた。結果はあと4名が負けて1対4となったが二年連続優勝となった閉会式には静岡プラスバンドも来場し、国歌演奏のうちに6名での国旗掲揚も経験させてもらった。翌日には吉永さんがあとの5名を引き連れて校長室へ優勝の



前列左から吉永・伏見・杉山
後列左から櫻井・岩崎・曾根先生

報告にも行った。放課後部室で卒業生が来てわけのわからぬ「お説教」が二時間行われたおまけつきがあった。

三学期になると予餞会が行われ各クラブでアトラクションを行うという。私に相撲部代表で相撲甚句をやらないかという要望があった。勝手わからぬし、一年生でもあるし、返事に困っていると、吉永さん曰く「俺も一緒に出てドスコイとかホイとかいう合いの手を入れるから」と言われ決断。なんとか役を果たすことが出来た。賞賛ありヒヤカシあり良きにつけ悪しきにつけ教師・上級生の目にとまった様子でその後の行動が注目されていく。卒業してからは吉永さんと三回国体へ一緒に出場してリードしてもらったりしたが、当時の市では先輩選手も会の年寄衆も自営業が殆どで「会社員としてスポーツ選手としてのあり方」をいろいろと教えてもらった。論理的かつ丁寧な語り調は年寄衆からも信頼され、相撲部の復活の折・市体協との交渉等県連内の意見調整に卓越した能力を発揮された。まだまだ種々指導を仰がねばならぬ矢先の急逝は惜しみてあまりあるものです。＼ちからアーカイブス＼もまだ少し続けます。

人物アラカルト②

三和酒類社長 西太一郎氏

昭和四十一年大分国体時、静岡県青年選手団監督杉山陸・選手加藤忠男・藤原秋義・上杉隆信・加えて清水支部湊謙が民泊した宇佐市橋津の酒屋さん若旦那（当時）である。一般選手団監督滝川昇・選手下村勝彦・中世古勝利・荒井俊貴・岩崎安次の民泊は宇佐神宮職員松本さん宅であった。

平成十年静岡が宇佐大会に出場した折、会場のテナントに下町のナポレオンとして名のある「いいちこ」の酒店があった。それらしき話を聞いたことがあったので橋津の酒店ということだけで尋ねてみたら「それならうちの社長です」ということだった。求められるままに名刺を渡して来たら、後日西氏本人から昔の思いを語る手紙をいただいた。これは「会報ちから」で紹介した。その後、平成十五年の静岡国体に合わせて、時に大分県教育委員長を務めていた西氏は「大分県選手団の副団長として来静するので往年の皆様都合がよかったらお会いしたい」という旨の要望が県体協（現県スポ協）を通してあった。だが、杉山・加藤・藤原・上杉は体調不良、湊は故郷宮古漁協の組合長であり、残念乍らこの再開は現実出来ず仕舞であった。西氏はことし一月に他界された報を新聞紙で知った。

享年八十三才